



Title	追悼
Author(s)	松岡, 正喜; 芝山, 豊; 千歳, 正信
Citation	モンゴル研究. 2018, 29-30, p. 71-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102448
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《追 悼》

内藤君のこと

松 岡 正 喜

大学入試を機に内藤君と知り合いになった。1969年のことだった。

この年のモンゴル語の入学生は16人。新入生歓迎の行事も終わり、それぞれに言葉を交わすようになって分かって来たのが、多くが浪人を経験していたということだった。内藤君も私も浪人を経験していた。現役は3～4人しかいず、浪人をして片身の狭い不安というか、後ろめたい気持ちがいくぶん解消されたように記憶している。このころ外語は浪人生の比率が、西洋語より東洋語のほうが高かったように思う。

1969年は東大の入試がなかった年だった。浪人をして入学した学生の多くが京大を落ちて入って来ていた。中には岡山大学や滋賀大学を辞めて来た学生もいた。入学して初めの頃は授業があったように覚えているが、5月の連休を過ぎて6月に入ると軒並み休校が続いた。大学はいわゆる「学園紛争」の真ただ中にあった。そして封鎖に入った。

連日のようにアゴラ集会なるものが開かれていた。主導者の主な学科は中国語・ロシア語の学生のようなだった。いつ頃かはっきり覚えていないが、内藤君の姿を見たことがある。後にべ平連の集会でも何回か顔をみたことがあった。内藤君はこの手の集会に関心があるんだな、と思った。私は浪人していた頃から「赤旗」を勧められ、読み始めていた。と同時に、予備校に比較的近かった立命館の広小路学舎に足を向けていた。反民青のノンセクトラディカルの集会だった。同志社も近かったが、なぜか行かなかった。要はそれぞれのセクトの区別がこの頃の私にはできていなかった。大学に入学してからもしゅうぶん分かっているとは言えなかった。

秋になると封鎖が解かれ、大学はいくらか正常さをとり戻してきた。このころから16人が揃ってモンゴル語の授業で顔を合わせるようになった。「帝国主義大学解体」を叫んでいた学生が急に静かになった。なんと4回生の中には学生服に身を包んで就職活動をし始める者がいた。

「あれっ、『帝国主義大学解体』って叫んでたじゃないか。それなのに、なんで今さらそのような恰好で就職活動を始めたり、勉強するようになったんだ？おかしいじゃないか」と先輩の後にについて責め寄ったことが何度かあった。彼らに対する不信と大学を変えていくためにはどういう力が必要なのか、考え込むようになった。この頃だったと思うが、内藤君と話をするようになった。

あるとき英語のテストがあった。

「なんや、あんさんと点が一緒や。京都を英語で案内しとったんやろ」

「ちょっとだけな」

これには参ってしまった。一本とられてしまった。それにしても直截に物を言う人だな、と思った。浪人時代アメリカの旅行者を、英会話を学んでいた仲間で案内したことがあった。それをさも自慢げにどこかでしゃべっていたのかもしれない。このときこれ以外のことも話したはずだが、この何気な

い内藤君とのやり取りがいまでも記憶に残っている。英語の講読の授業だったと思う。二人とも85点がついていた。

授業のことで言えば、東洋史の授業が忘れられない。1回生か2回生の教養の頃だったと思うのだが、内藤君も東洋史の授業をとっていた。あるとき、授業担当の外山軍治先生いわく「この教室に畏れ多いことに私の恩師に当たる内藤湖南先生のお孫さんがいらっしゃる。大恩ある内藤先生のお孫さんの前で講義するなど、誠に恥ずかしい限りである。内藤先生は日本における東洋史学の一大権威で、東に白鳥山脈あり西に内藤山脈ありと言われた方であり、云々…」と。このことは今でも記憶に鮮明だ。外山先生のやや時代がかった、しかし滔々として歌舞伎役者まがいの講説に驚き恐れ入った。先生は金朝史研究の権威と言われていた。通常の授業は高低差の低いトーンで淡々と進んでいたから、この時ばかりは先生の破格の感情移入した話に聞き入った。

外山先生の大仰な言い回しと違って、内藤君の受け止め方はクールであった。先生の話に絡めてお祖父さんの自慢話でも出て来るかもしれないと思ったが、そうではなかった。彼は淡々としていた。これは後で気づいたことだが、内藤君の物事を距離を置いて観察し、突き放して観る見方はこの頃からあったように思う。感性的な人間である私とは違っていた。

浪人時代、私はソビエト科学アカデミー発行の「世界史教程」を読んでいた。加えて、予備校の歴史の先生から影響を受けていた。「歴史は覚えるものではない。考えるものだ」ということを教えられた。それもあり大学では歴史学をやりたいと思っていた。語学ではなかった。外山先生の金朝史に格別興味があって授業に出ていたわけではない。清朝の事実上の支配下にあったモンゴルをやる以上、中国史の一つも知らないでは済まされないと考えていた。清朝の末期は日本が大陸侵略を始める前段階の時期とも重なっていた。中国への侵略を想定して日本は朝鮮半島の植民地化へ乗り出していた。朝鮮近代史もやってみようと思い井口和起先生(後の京都府大の学長)の「朝鮮近代史」の授業も受講した。歴史の教養書・専門書を読み始めた頃である。この頃から内藤君と歴史についていつとなく話をするようになったと思う。私が何をこの頃しゃべったかは覚えていない。また調子に乗ってべらべら空虚なことを言っていたのだろう。

ほどなくしてE・H・カーの「歴史とは何か」(岩波新書)を二人で読むことになった。前から知っていた本だったが、読み切っていなかった。どこことなくパンチ力がなく、平板な叙述に少々食傷気味だった。しかし、二人で読むとなると相手のあることだから着地点がある。結果この本になった。内藤君の提案でもあった。上六の交差点を渡り、北へ少し歩いた左手に喫茶店があった。外語の学生が時たま利用していたが、2階は客でいっぱいになることはなかった。輪読会をやるには格好の場所に思えた。声に出して1ページずつ読んでいった。お互い疑問に思った箇所を出して感想を述べ合った。私は内藤君に教えてもらうことが多かった。あるとき私が読めない字が出てきた。「陥穽」が読めなかった。まずいと思ったが、もうどうしようもない。「読み方が分からない」と言ったら、内藤君は黙ってさりげなく教えてくれた。またあるときは、江戸時代に活躍して幕府から弾圧された蘭学者や思想家の話もしてくれた。高野長英や安藤昌益の名前を知ったのも内藤君からだった。内藤君は私の一歩前を進んでいた。

1970年の7月、有志6名と大学の先生(山口先生)の援助で「モンゴル研究会」を立ち上げた。夏休みに小豆島の後輩のお家に泊めてもらい、「アジア・アフリカ問題入門」(岩波新書、岡倉古志郎著。先

生は外語の教授、岡倉天心の孫)とモンゴル語の学習を行った。内藤君は当初は研究会に入っていなかったが、のちに加わった。私たちの学年では内藤君と私の二人だけであった。この研究会での本読み・学習が私たちの学生生活の中心であった。のちにドイツの留学から帰ってこられた小貫先生を交えてモンゴル研究の方法論やモンゴルの歴史的発展段階をどうとらえるかなど、研究会仲間と議論した。さきに紹介した朝鮮語科の井口先生らと資本論の輪読会を始めたのも、この頃と前後していた。この読書会は途中で挫折したが「商品論」の箇所まで先生と議論したことを覚えている。私は1回生の秋には先輩の勧めで民青に加入していた。大学のカリキュラム改革をして学生の学びたい授業をどう作り出していくか、学習しながら大学当局と交渉する取り組みを始めていた。

3回生の夏休みが終わって輪読会をやっていた喫茶店で久しぶりに内藤君に会ったとき、彼は「モンゴル人民共和国史」を1ヶ月かけて読んだと言っていた。もちろん原文である。モンゴルの歴史家による正統的通史であった。かなり大部の本で、彼の努力家としての営みを垣間見た思いがした。また私は遅れを取ってしまった。

その頃、私は自治会の三役をやっていた。忙しい役回りのため授業から足が遠のいていた。それが何か月も続くと思わずから授業から遠ざかり、遅れをとっていることを知りつつ、そのままの状態にしまっていた。4回生の頃は、とりわけその後半は選挙活動に没頭した。当然、モンゴル語学科の同級生からは相手にされなくなっていた。3名の女子学生のうち2人が校内で顔を合わせると声をかけてくれる程度であった。内藤君ともだんだん距離が遠くなっていった。私は柔道部にも所属していた。真面目な部員ではなかったが、時間があれば練習に参加していた。時おり内藤君と顔を合わせると「あんさん、まだ野蛮なことやとるん」と声をかけてきた。内藤君独特の皮肉交じりの言葉だった。後になって分かったのだが、勉強を続ける意思があるんだったら柔道も学生運動もどこかで切り上げないといけない、という忠告であったような気がした。事実、京大の大学院や大阪市立大学の大学院に進んだ先輩・後輩は程よいところで切り上げ、勉学にスイッチを切り替えていた。

不勉強と努力不足が重なって私は同期生より2年遅れで卒業した。大学院へ行って研究の道に進もうと考えていた。会社に入って宮仕えする気にはなれなかった。内藤君は時事通信の記者の道に進んだ。お祖父さんの道を選択したんだと思った。私はアルバイトをしながら4畳半の安アパートで「奮闘」の日々が始まった。その頃だったと思う。だれにも住所は知らせていないと思っていたが、内藤君が訪ねてきてくれることになった。誰から住所を聞いたのか、それとも私が何かの機会に知らせていたのか、とにかく訪ねてきてくれた。私の安アパートは木造・モルタル造りの築数十年の建物だった。2階の廊下はやや傾きかけていた。本がけっこうあったので座が抜け落ちないかなと思ったほどの年季の入った代物だった。内藤君が訪ねてきてくれたのがちょうどお昼頃だった。せっかく訪ねてきてくれるのだからとお昼の準備をしていた。お皿を買ってきて肉を焼いて提供した。学生時代、内藤君と何度か一緒にご飯を食べたことがある。彼に好き嫌いを聞いたことはなかったが、概ねトンカツや肉料理が好きだったと思っていた。それで肉を焼いて出したというわけである。ご飯は「冷や飯しかないけど」というと、「いや、かまへんで」と言ってくれた。これはよく覚えている。あの頃は「チン」がなかったのだ。果たして内藤君は美味しそうに食べてくれた。日頃はもっといいものを食べているだろうに、気にすることなく平らげてくれた。そのとき何を話したか覚えにないが、訪ねてきてくれたこと、私の作った食事を美味しそうに食べてくれたことだけで嬉しかったように思う。そのとき買っ

た皿は2枚。今でも残っている。その皿を使うたびに当時が甦ってくる。

大阪府警詰め、2～3年はそこで「まあ、修行ですな」と言っていたように記憶している。私の勉強の進み具合を気にかけて来てくれたのかもしれない。

そうこうしているうちにその年の年末になった。1単位残して大学に残っていた。来年は卒業だというとき、私のアパートが火事に見舞われた。冬の12月22日の真夜中だった。家庭教師のアルバイトから11時を回ったころ帰ってきて、遅いので寝ていた。するとハス向かいに住んでいた近大の農学部に通っていた岡山出身の真野君という学生が「松岡さん、火事です。起きてください」と大声でたたき起こしてくれた。彼の部屋の真下が火元だった。一緒になってアパートの住民に声をかけて回った。そのうち煙に巻き込まれそうになり、着の身着のままアパートから飛び出した。アパートはすぐに燃え上がった。30人ばかりいた住民は全員無事だった。12月の真夜中は寒かった。布団から起きたままの恰好だった。唯一頭が働いたのが、田舎へ電話を掛ける10円玉を取りに部屋に入ったことだ。あとは何もできなかった。消防車を遠巻きにしながら、燃え落ちるアパートをただ茫然と見ているだけだった。

その夜は結婚の約束をしていた未来の妻の家に寄せてもらい、お世話になった。私の焼け落ちたアパートからそう遠くないところに彼女の家があった。幸いだった。その彼女の家で2～3日お世話になっているとき、内藤君が家を探して訪ねてきてくれた。内藤君がどうやって私がいるところを探しあててくれたのか、たぶん聞いたと思うが記憶にない。「松岡が火事で焼け出された」との一報を小貫先生をはじめ、モンゴル研究会のメンバーやら知り合いに連絡してくれたのは、内藤君だった。「警察詰めの記事にはこの手の一報が真っ先に入るんや」と言ってくれたが、無視しても構わないことだった。

内藤君は余計なことを言わない人だった。言うときは核心をつき直截的だった。そしてリアリストであり行動の人だった。「時事通信はニュースの問屋みたいなもんや。けどな、『赤旗』も【時事通信発】という提供元をつけて記事を書くようじゃあかんで」とよく言っていた。「赤旗」にも事情があったと思うが、私は反論しなかった。批判とも激励とも取れたからだ。

生きていてくれたらいいのになあ。お互い時間が取れたらもっと教えてもらえたかもしれないのに。若いころ喫茶店の隅で本を読んだ時のように、今度は人生を経てきた者同士で語り合い、話しあうことができたかもしれない。いや、きっと私のほうが教えてもらうことのほうが多かったに違いない。本を読むこともできたかもしれない。どれだけそういう機会が持てたか分からないが、二度ともう内藤君に会えないと思うと、若いときに交わした言葉・共有した経験が、内藤君の立居振る舞いとともにより一層鮮やかに甦ってくるのを感じる。

内藤君は決して死んではいない。この世にいるものが死んだ人のことを忘れない限り、その人は人の心の中で生き続けていると私は思う。

「あんさん、そりゃあかんで」、「野蛮なことはやめときなはれ」、「やるときは真面目に、集中してやらんとな」、「時事通信から記事を提供してもらってるようではあかんで」等々、内藤語録は私だけではなく、彼と行き来のあった人の心に、それぞれの思い出と共に生き続けるだろう。

2018年3月31日

(まつおか まさき)

《追 悼》

内藤恭介さんへ

芝 山 豊

『モンゴル研究』誌に追悼文を書くのは辛い仕事です。

これまでに、司馬(遼太郎)さん、磯野(富士子)先生の追悼文を書きました。司馬さんや磯野先生からいただいた言葉がなければ、モンゴル研究者としての私は存在しなかったという思いで、拙いながら、一所懸命書かせていただきました。

そして、今回は、研究会草創期の先輩、内藤恭介さんのために追悼の筆をとっています。司馬さんや磯野先生と同じく、内藤さんがいなければ、いまの自分はないという思いがあるからです。

内藤さんは私より5歳年上です。私が大学の1年に入った頃、内藤さんは専攻科におられたと思います。

「かの内藤湖南の孫で御公家さんみたいな人」と小貫雅男先生から聞かされていたその人は、白いワイシャツに、黒のズボン、下駄を履いて、色白でちょっと小太りの体に扇子で忙しく風を送りながら現れました。

「博引旁証やけど、自分自身の考えはどこにあるの？」

「それで、あんさん、ほんまは、なにがやりたいの？」

研究会での内藤さんのコメントは、柔らかなアクセントながら辛口、しかも、常に正鵠を射たものでした。内藤さんの前で発表するときは、いつも、とても緊張しました。ときにはシニカルで辛辣なコメントにも、常に内藤さんの優しさが隠れていて、言われたことに勇気づけられることはあっても、傷ついたことは一度もありませんでした。

内藤さんが翻訳して『モンゴル研究』に発表された僧院による牧民搾取についてのイシ・ナツァグドルジの論文の注の整理をお手伝いした時には、資料のとり扱いの正確さについて、教えていただきました。時事通信に入社され、新人記者のお決まりのコース、社会部のサツ回りをしておられた頃、スーツに身を包み、美味しいケーキの入った箱をぶらさげて、研究会の例会にぶらりと現れては、現代社会の断面や記者クラブ制度、メディアの仕組みなど、学生の知らない世界について、あれこれ教えて下さいました。

私は就職後間もなく、体を壊して入院するはめになったのですが、ある日、病室で、所在なく本を読んでいると、突然、内藤さんが現れました。忙しい先輩にお見舞いをいただくなど全く予定せぬことで、とても驚いて、いま思うと、まともな対応もできなかったのではないかと思います。ただ、鮮明に覚えているのは、まさに、寸鉄人を刺す次の一言です。

「新書版ばかり読んでいると、新書版みたいな人間になるよ。」

その時、何を読んでいたのか、覚えていません。しかし、いまでも、資料集めや原稿を書いている最中に、ふと、内藤さんの言葉を思いおこして、自問します。

「原典と格闘しながら、自分の思想を組あげていく本当の学問をしているのか？おまえはお手軽な《新書版みたいな人間》になっているんじゃないのか？」と。

外信部に移られた内藤さんは、ロシアや中東など海外で活躍されました。そのころお書きになった記事の幾つかはいまでもWEB上で読むことができます。

物理的な距離もあって、疎遠になってしまっていたのですが、村井宗行さんから内藤さんが50代にして、あっさりと通信社を退職し、悠々自適、晴耕雨読の生活に入られたとの消息をうかがい、連絡をとって、東京でお会いすることにしました。

2005年に、小貫先生の古希と『モンゴル研究』創刊30周年を記念して研究会から本を出そうという、結局は幻に終わった計画の相談が口実でした。

新宿の紀伊国屋で待ち合わせ、食事をして、本題もそこそこに、四方山の話をしました。読書三昧の生活であろうと想像しつつ、毎日、何をしているのかを尋ねると、高尾山麓を日がな自転車で行っているという意外な返事でした。

外大時代の思い出話の他に、大学での仕事の愚痴もこぼしました。

その時、学者の家に生まれ、周囲に多くの研究者を見てきた内藤さんは、次のような金言を教示されました。

「学者にとって最も大事なものは Last man standing になることやね。」

「どういうことですか」と尋ねると、内藤さんは茶目っ気のある口調で解説してくれました。「いかに優れた研究成果や天才的な着想を残しても、学者が夭逝すれば、後にのこっている才能の乏しい連中がその研究成果や着想を使って死ぬまで商売をすることになる。学者、研究者は最後に残ったものが勝ち。だから、どんなことがあっても、自分より利口な連中や馬鹿な連中より長生きしなきゃだめ」というのです。

運動嫌いだと勝手に思いこんでいた内藤さんが、毎日、自転車で体を鍛えているのは、これから大きな仕事をまとめようとしているからに違いないと一人合点しました。

再会を約しながら、ご無沙汰を続けるうちに、2013年10月、内藤さんの訃報を伝える電子メールが飛び込みました。ご本人の意思で入院は伏せられていたので、お見舞いにうかがうこともできませんでした。入院から僅か1ヶ月後の帰天とのことでした。

余りに突然で、信じられず、「内藤さん、Last man standing やって言うてはったやないですか！」とところの中で叫びました。

モンゴルでは日本資本によるウラン開発が始まり、日本では1930年代さながら、特定秘密保護法施行や憲法の捻じ曲げの危機が迫るいまこそ、内藤さんの知識と経験と分析力が必要なのに・・・。

ヒトリカガミニウチヨリミレバ、皺ノヨッタヲアハレムバカリ（誰知明鏡裏 形影自相憐）という齢になり、周囲で、叱ってくれる人がめっきり少なくなりました。内藤さんが叱ってくれないと、寂しくてたまらない。

そんな思いを言葉にしたら、内藤さんの声が聞こえるような気がしました。

「なにを甘えてんの。後に残ったからには、自分たち自身で問題と格闘して、あんさんらのいつも言うてるほんまのモンゴル研究をやらなあかんでっしゃろ。」

はい。『モンゴル研究』誌は創刊40年、モンゴル研究会はこれからも、こころの中で内藤さんと対話しながら、渡されたバトンをつないでいく覚悟を新たにしています。

ありがとうございました、内藤恭介さん。あなたを先輩にもてて、とても幸せでした。

2014年5月10日
(しばやま ゆたか)

《追 悼》

谷 博之君を偲んで

千 歳 正 信

谷君。

谷君との別れがこんなにはやく訪れるとは夢にも思っていませんでした。

わたくしは、谷君とは大阪外大モンゴル語科で同級生でした。

大学卒業後はお互いそれぞれの道を進み、お互いあと少し、老後となってから時間が十分あるときにいろいろ思い出話でもしようと思っていたのが、非常に悔やまれてなりません。

今日は仕方なく一方的に私の谷君への思い出を語らせていただきますが、どうぞそのことをお許しください。

谷君、あなたはいつも飄々とされていました。

少なくとも私にはそう見えました

しかし、心の内では、人知れない葛藤があったのかもしれません。

谷君、あなたは、老子・莊子が好きでしたね。

無理して偉くなろうとしない、成功しようとしたりしない。

自分が納得するように頑張って、後は大宇宙の法則に委ねればそれで良しとされたのでしょうか？

人類が世界共通語を持つという、エスペラントの思想に共感して、エスペラント語の普及活動もされ、参考書も何冊か書かれました。

老荘思想とエスペラントは、深いところで繋がっていて、どこか共通性があると思います。

谷君、あなたは言語ヲタクで、世界のあらゆる言語に精通する、言語の天才でした。

ブルガリア語の翻訳も手がけていたとも聞いています。

モンゴルのキリル文字、旧文字、パスパ文字がすべて読める人は、今となっては少ないと思います。

人種・民族・国籍を越えて、あらゆる人類と仲良くなろうとしていました。

時には犬や猫も含めて、

いわゆる、コスモポリタン、自由人でした。

さまざまな現実を、逆境も含めすべて受け入れる柔軟性を持ちつつも、自分の思想的立場は決して変えない、良い意味での頑固者でした。

その頑固さが我々凡人には到底理解できなかったのかも知れませんが、今となってはそれを知る術もありません。

それが非常に残念です。

最後に、谷君にはお姉様が3人もおられると聞いております。

弟に先立たれる御心痛はどんなにお察ししようとしても察しきれないものだと思いますが、なんとかこの悲しみを乗り越えて、お身体にも気をつけていただきたいと思います。

谷君、どうぞ安らかに眠ってください また、いつか、天国であなたとお会いできるかもしれません。

この弔辞は、同じく同級生の小松君とともに考え、わたくし、千歳が同級生を代表して読ませていただきました。

ご冥福を心からお祈り申し上げます。

平成26年8月28日 千歳正信

(せんざい まさのぶ)

[追記] これは弔辞として読まれたものです。

《追 悼》

中西 和隆君を偲んで

千 歳 正 信

作家、ツェンディーン・ダムディンスレンについての彼の考察に関しては、研究会誌の『モンゴル研究』に譲るとして、ここでは、大学時代の同級生、中西和隆君との思い出を書いてみたいと思います。

私たちが1974年(昭和49年)にモンゴル語科に入学したとき、上本町六丁目の大阪外大のキャンパスでは、「全共闘世代」が終わり学内にヘルメット姿の学生を見かけることも少なくなっていました。徐々に政治的な関心も以前と比べて失われてゆき、「ノンポリ世代」と呼ばれ始めていたのが我々の学年です。

カール・マルクスの『資本論』の難解な読書会のなかでも、中西君は今から思えば、サブカルチャーの走りか、マルクス兄弟の素晴らしさを私に説いていました。私はたちまち、それに感化されてしまい、書を捨て街に飛び出し、一乗寺の京一会館で深夜映画を漁るように観たものです。現在の私のDVDのコレクションの中にも、マルクス・ブラザーズものはたくさん残っている次第です。

モンゴル文学の話ではなくて申し訳ないですが、当然、彼の文学的蘊蓄にも相当影響を受けたもので、その中でも一例を取り上げるとしたら、小林信彦でしょうか。彼の代表作、オヨヨ大統領シリーズはよく薦められました。大袈裟な言い方ですが、小林信彦をオタク的な文学者と位置付けるなら、そのオタク的な伝道師が中西君であり、現在の私のオタク的な面はまさにその影響を受けたものです。

また、中西君は推理小説にも造詣が深く、正統な推理ものから外れたところかもしれませんが、フィリップ・マローウに傾倒していました。ハードボイルドを目指し、ハンフリー・ボガード風にトレンチコートを着こなそうとしていたのですが、どうしても当時流行っていた刑事コロンのヨレヨレのレインコートにしか見えませんでした。

大学時代の私生活のことも少々触れておきましょう。当時、モンゴル語科生の一部には、ふざけてサロンと称していた伏見の京阪丹波橋駅近くの私の実家にもよく来てもらいました(小貫先生にも来ていただいてお酒を飲み交わしたこともありましたが、また逆に中西君のご実家にも呼ばれてよく寄せていただきました。上本町六丁目辺りで飲んだ後、私にとっては上八のキャンパスからの帰宅とは逆方向になる、ほぼ明石に近い国鉄朝霧駅を深夜目指したものです。今は海峡大橋が架かっていますが、海を見渡す、その後も大好きになった鐵道路線です。

お父様は外洋に出かける船員をされていたそうで、めったにお会いすることはなかったのですが、小柄なお母様には良くしていただき朝御飯も何度かご馳走になりました。中西君はかなり大柄で、外大の柔道部からも誘いを受けるほどでしたが、その体格からは想像も出来ないほど繊細なところがある人柄でした。きっとお母様の教育の成果だと思っておりました。

彼の数少ない欠点のひとつは、お酒に弱いと言うところでしょうか。お互いの実家で夜を明かして飲む時はそうでもないのですが、キャンパスや当時開催されていた語科合宿(今でもあるかもしれませんが)の酒盛りでは、彼の醜態を何度か目にしています。衝撃的でアナーキーな行動があったことは

確かですが、ここではその詳細は彼の名誉の為に伏せておきましょう。

コメディっぽいエピソードなら紹介出来ます。冬に、サロンの実家で酒を酌み交わしてお互いの死生観を論じていた時、彼は冗談だとは思いますが、何故か戸を締め切って練炭心中を試みようと言いつ出したのです。当時、日本間の暖房には練炭火鉢を用いることがよくあって、戸を締め切れば酸欠状態になり、「阿鼻叫喚の巷と化す」(彼の好きな表現です)とでも考えたのでしょうか。しかし、日本間には当然欄間があり、酸欠になるはずもなく、彼の目論見はあっけなく外れたのですが、いたずら好きな眼差しでしようもない提案をよく持ち出していたものです。

最後に、彼の繊細さに纏わる話をして、この原稿を締めたいと思います。大学を卒業し、年賀状だけを交わすぐらいの付き合いの頻度になって行き、いずれその年賀状も、私の引っ越し、そして、渡米、結婚、何度かの引っ越しで次第に途切れて行くのですが、年賀状の一通に、富山の雨晴海岸からのものがありました。雨晴海岸はその絶景で有名で、その海岸の素晴らしい風景を目にすることも多いと思うのですが、年賀状の彼の写真は雨晴駅の駅名標だけでした。それを見て彼らしいなあと思った次第です。彼は大柄な体格ではありましたが、決して自分を実物以上のものに見せかけようとせず、いつも等身大の姿を私に見せてくれていたのだと思います。私はその点反省をしなくては。中西君、今までいろいろありがとう。ご冥福をお祈りしたいと思います。

(せんざい まさのぶ)